

## 台湾数学会訪問記

日本数学会理事・東京大学大学院数理科学研究科  
石毛 和弘

台湾数学会（正式には中華民国数学会）における2019年度年会在、昨年12月7日、8日の二日間の日程で国立中興大学（台中市）で開催された。日本数学会と台湾数学会の交流協定に基づき、日本からは二年に一度の頻度で台湾数学会に訪問団を送っており、今年がその年にあたっていた。今回、日本数学会理事会からは寺杣友秀理事長、小菌英雄前理事長と私、さらに、台湾数学会年会における解析分科会、確率論分科会及び力学系・生物数学分科会での特別セッションのため、それぞれ2名ずつ、富田直人氏、猪奥倫左氏、福島竜輝氏、楠岡誠一郎氏、川平友規氏、千葉逸人氏の6名が帯同し、結果、9名からなる大所帯での訪問であった。この特別セッションが開催される分科会は台湾数学会からの要望による。今回の訪問では、この他、両数学会における交流協定改訂案の作成も理事会としては大きな目的の一つであった。私は会計担当理事であるが、台湾数学会理事長 Jong-Sheng Guo（郭忠勝）氏とは研究分野が近く旧知の仲であったこともあり、訪問団の一員となった。

理事会の3名は12月6日に羽田から発ったのであるが、3名が別々に航空機（エコノミークラス）を予約した偶然の産物として、私は小菌氏と行きと帰りが同じ便となり、台中への行き帰りを共にした。台湾数学会年会の前日である12月6日の夕刻には、台湾数学会による歓迎会が予定されていたが、私と小菌氏の台北行きの飛行機は台中までの移動を考えると歓迎会に間に合うかどうかの微妙な便であった。私達は台北松山空港に到着後、タクシーにて台湾新幹線（台湾高鐵）の台北駅に向い、台中行きの乗車券を購入しようとした。しかし、それは金曜日の夕刻、台北から南に向かう人達の多い時間帯であり、都合の良い時間での座席指定が難しかった。しかたなく、予算オーバーであることは承知の上で日本のグリーン車両やグランクラス車両に相当する座席の指定を行ったが、それでも一時間半の暇を潰さなければいけなかった。期せずして自由時間を得た私達は、おじさんの常という言い訳の下、麦酒でも飲んで時間を潰しますか？ということになり、麦酒が頂ける店を探したのであるが、日本とは異なり、これが一苦勞、なかなか見つけられない。日本食の店ならばあるだろうと探しまくるとい意味のわからない努力を重ね、何とか麦酒にありついた次第である。それでも缶麦酒ではあったのだが、結果として楽しく時間を潰すことができた。ほろ酔い気分、そして同行者がいることに油断した結果、同じ時刻に発車する進行方向が逆の列車に乗車しそうになるという出来事

もありつつ、無事乗車、一時間後、台中駅に到着した。車両と車両の間には立ち席の人も多く、一時間程度の乗車であれば立ち席での移動でも良かったとも思ったが後の祭りであった。台中駅からホテルまでは、台湾数学会からの事前の連絡に従いバスに乗ったものの、下車するバス停に不安を感じ、どこで降りるか二人で意見を交わしていた。そのとき、見も知らない台湾の男性から適切な情報を得、さらに、バスを降りたところで、これまた見も知らない台湾の女性からホテルの方向を教えて頂く等、台湾の方々の優しさを目の当たりにする出来事が続いた。台北駅での時間ロスのため歓迎会には間に合わなかったが、ホテルのロビーへ向かうエレベータにて、偶然にも歓迎会に参加し戻ってきた Guo 氏との旧交を温めつつ、寺杣友秀理事長を始めとした日本からの訪問団一行に出会った。その後、夕飯を食べ損ねていた私と小藺氏は、ホテルのバーのようなところで簡単な食事？をして次の日に備えた。

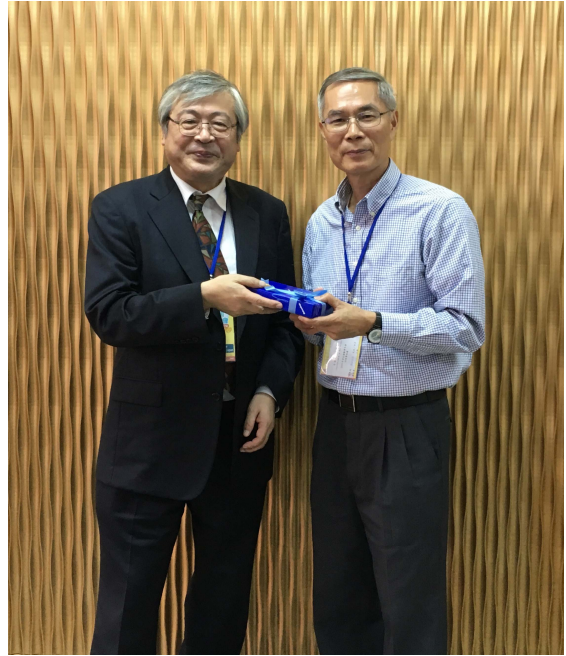
台湾数学会の用意してくれたスプレnderホテル台中はとても滞在しやすく、また、朝食もバイキング形式の豪華なものであった。12月7日の朝食会場では、J. S. Guo, 寺杣友秀の両理事長と同じテーブルを囲むことができ、交流協定の改訂等を踏まえつつ雑談したり、台湾での朝食はやはりお粥だなと思ったりしながら朝食を楽しんだ。ホテルと台湾数学会会場の行き来は台湾数学会の方々と一緒に台湾数学会が借り入れたバスで行い、年会会場では案内係の学会関係者にお世話になるなど、至れり尽くせりの対応であった。ただし、日本からの訪問団の1名がホテルから年会会場である国立中興大学まで徒歩にて移動し、台湾数学会の方々を驚かせていたのは余談である。

台湾数学会年会の初日午前は、開幕式、基調講演、写真撮影、茶会、分科会という順にプログラムが組まれていた。開幕式会場では、ポップなデザインによる「中華民國數學年会」の吊り看板やハートマークの中に描かれた国立中興大学のロゴマークが目目を引いていた。壇上の花の飾り方も日本とは異なるように感じた。

開幕式は、J. S. Guo 台湾数学会理事長の挨拶から始まり、国立中興大学学長の挨拶へと続いたが、日本からの



訪問団への配慮があったのであろう、挨拶はすべて英語で行われていた。また、国立中興大学学長の挨拶では、国立中興大学は台北帝国大学に由来するといった歴史が語られ、日本への配慮を盛り込んだものになっていたのは印象的であった。その後、Yousef Saad氏（ミネソタ大学）が固有値問題に関する数値解析の基調講演を行った。写真撮影の後、コーヒーやほうじ茶のような何らかの茶の他、甘めの軽食が用意されていた茶会を経て、分科会へとプログラムは進行した。私はGuo氏の提案に従って分科会には出席せず、Guo氏と2人で別室に移動し、昼食までの間、近況や私の研究分野における



寺杣理事長とGuo台湾数学会理事長

今後の台湾・日本の研究協力関係をどのように発展させていくのか等を話し合った。それに伴い、再度、私が自分の研究活動の一環として台湾に再訪することが決まったことはうれしい限りであった。丁度良い頃合いにお昼になり、寺杣理事長、小菌前理事長や台湾数学会の理事らが会議室に現れ、Guo氏を含めた台湾数学会理事3名と日本数学会理事3名でお昼を取り、その後、交流協定見直しの原案作りを話し合った。私は単に話し合いを眺めていたに過ぎないが、両数学会が納得できる原案ができたと感じた。その他、台湾数学会では、これから新しい理事と理事長を決めるためのプロセスが始まるとのことで、そのプロセスの進め方や規則について興味深く拝聴した。

午後は私の専門が解析ということもあり、解析分科会の特別セッションに参加した。そこでは、訪問団の一人である猪奥倫左氏が講演を行った。猪奥氏の講演は、氏の取り組んでいる非線形放物型方程式の適切性理論に関するものであり、台湾数学会での特別セッションであることに配慮された良い講演だったと感じた。実際、台湾側からも幾つか質問が出ていて、活発な研究討論が為されたように思う。その後、台湾側からの講演が続き、年会初日の解析分科会特別セッションは終了した。午後の茶会を挟んで、M.-L. Hsieh（程舜仁）氏による岩澤理論に関する年会基調講演、台湾数学会総会と様々な賞の授賞式が行われた。台湾数学会には学会賞、学術賞、特別功労賞、若手数学者賞、博士論文賞、修士論文賞があるようであるが、受賞対象者がいないこともあるようである。授賞式は中国語で行われたため、授賞式の進行は良くわからなかった。しかしながら、博士論文賞、修士論文賞では、受賞

者の氏名と業績題目はもちろんのこと、学生の指導教官の氏名も発表され、何人かは受賞者とその指導教官と一緒に壇上で記念写真を撮っていた。同じことが日本で行われることは想像し難いが、日本数学会で同じことをしたらどうなるかなと想像していたら、壇上で行われている写真撮影が微笑ましく思えてきた。指導教官が壇上に上がる場合とそうでない場合があり、それも興味を引いた。授賞式の後、会計報告が為されたようであるが全く理解できないので退出し、台湾数学会の用意したバスにのり、懇親会会場に向かった。

年会初日の夕刻から始まった懇親会は参加人数が多く盛大なものであった。J. S. Guo 台湾数学会理事長や国立中興大学学長の挨拶、寺杣友秀日本数学会理事長の挨拶を経て、懇親会は始まった。国立中興大学学長の挨拶では、「二十年後には台中は台北を抜いて台湾一の都市になるため皆さんは台中に来るのが早かった」という冗談も飛び出し、陽気な雰囲気の中で、懇親会が始まった。以前、台湾数学会年会に訪問した際の懇親会ではアルコール類は出なかったと聞かされていたため、どうなるのかと気をもんでいたが、無事、麦酒やワインが料理と共に出てきた。私を含めた日本数学会理事の3名は台湾数学会理事の面々やアメリカやカナダからの基調講演者らと同じテーブルを囲みながら丁寧なもてなしを受け、穏やかな、そして楽しい食事とワインを楽しんだ。私の隣は、British Columbia 大学（カナダ）からの基調講演者 Gordon Slade 氏の奥様であったが、彼女はかなりの日本通であり、Slade 氏夫妻が日本滞在中で経験した話やカナダにおける男女研究者の人数比の話等、貴重な話を伺うことができた。

懇親会終了後、Guo 氏が次の日に帰国する私達の新幹線を心配して下さり、秘書の方に私達と一緒にコンビニに行き新幹線の切符と座席指定をするよう手配してくれた。Guo 氏のきめ細かい配慮には感謝の念が絶えない。新幹線の切符を購入後、訪問団の何人かと一緒に様々な世界各国の麦酒が飲める店に行き二次会となった。理事の3名は早々にホテルに戻ったが、長い一日であったように思う。次の日、理事3名はそれぞれの所用のため台湾数学会年会二日目には参加することができず、午後の帰国便に間に合うように台北松山空港まで移動し日本に帰国した。今回の台湾訪問では台湾の方々の優しさに触れる機会も多く、再び、台湾を訪れることを楽しみにしながら帰国の途についた。

台湾数学会と日本数学会は互いに訪問団を送り合いながら交流の機会を作ってきた。何時から交流が始まったのか私は知らないが、台湾数学会と日本数学会の良い関係は一朝一夕で作られるはずもなく、今日までの様々な人達が関与し築き上げてきたものであろうことは確かである。今回の訪問でなされた交流協定改定案のように時間の経過と共に交流の形は変わっていくと思われるが、今後も長く台湾数学会と日本数学会の良い交流が続くことを強く願う次第である。